

國學院大學學術情報リポジトリ

因果関係を表す接続表現の文体的特徴：
現代日本語のコーパス資料を用いて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-04-16 キーワード (Ja): 因果関係, 接続表現, 文体的特徴, コーパス資料, 多変量解析 キーワード (En): 作成者: 付, 英, Fu, Ying メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001586

因果関係を表す接続表現の 文体的特徴

—現代日本語のコーパス資料を用いて—

付 英

1. はじめに

次の例1～2における（誤）は、いずれも市川（2010）が日本語学習者による誤用例として挙げたものであり、（正）はそれぞれの訂正例である（下線は筆者による）。

例1 （誤）田中は普段よく中国のことを記する本を読んでいる。したがって中国に付いて（ママ）詳しい。＜中国＞

（正）田中は普段よく中国のことを書いた本を読んでいる。だから、中国について詳しい。（市川2010：p.200により引用）

例2 （誤）私にとって、このような方法は有利な点もあるし、不利な点もあると思っています。これからは有利な点です。たばこを一服する人が嫌いな人もいれば、たばこの煙を嗅ぐと、病気になる人もいますからです。それゆえ、公共の場所ではたばこを吸えないよう規則を作ることは、たばこが嫌いな人にとって有利な点です。＜タイ＞

（正）私は、このような方法にはいい点もあるし、悪い点もあると思います。まず、いい点について書きます。たばこを吸うのが嫌いな人もいれば、たばこの煙を嗅いだだけで、病気になる人もいます。だから、公共の場所ではたばこを吸えないように規則を作ることは、たばこが嫌いな人にとっていいことです。（市川2010：p.314により引用）

上記の二つの誤用例の下線部の接続表現¹⁾は、厳密には誤りだと言い難いが、多少の違和感を覚える。例1で「したがって」を「だから」に訂正した理由として、市川（2010）は「話しことばに用いられる『だから』の方が自然なのは、『したがって』がかたい表現や、説明調の記述に向いていて日常的な話題には不適切（p.202）」

であるからだと述べている。また、例2については『『それゆえ』も原因を示すが、書きことばで改まり度が非常に高く、やや文語調の接続詞であるため、丁寧体の文章には合わない(p.316)』からだとしている。このように、日本語における接続表現は個々の意味用法のほかに、書き言葉か話し言葉か、改まっているかどうか、文体的特徴の相違に応じて使い分ける必要があることがわかる。

しかし、付(2024)が指摘したように現代日本語の接続表現に関する先行研究は、一語一語がどのような意味関係を表すかなどの意味用法に関する研究が盛んである一方、それらの接続表現の個々の文体的特徴の解明についての研究はあまり多くない。この点に関しては、馬場(2008・2010)からも確認できる⁽²⁾。また、田中(1984)、中俣(2022)などでは、接続表現の文体的特徴は日本語学習者の接続表現の習得を困難にしている要因の一つであると指摘している。よって、接続表現の文体的特徴についての研究は、日本語教育の現場における学習や教育指導に貢献できると考える。

そこで、本稿では、因果関係を表す接続表現⁽³⁾(以下、因果表現)を取り上げ、多様なコーパス資料を用いて網羅的に調査分析をし、日本語母語話者による因果表現の使用実態及びそれらの文体的特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

石黒他(2009)は、「接続表現は文章・談話のジャンルによって大きな影響を受ける(p.74)」と述べ、現代日本語でよく使用されていると見られる接続表現の全用法の137語を7種の調査資料(新聞の社説、新聞のコラム、論文、エッセイ、小説、シナリオ、講義)を用いてジャンル別に、それら接続表現の使用実態を明らかにした。しかし、石黒他(2009)の調査資料は、書き言葉に偏っており、話し言葉の資料は講義の類に限られている。

因果表現に関する先行研究は、「だから」「それで」「そこで」「そのため」「したがって」「なので」「で」など典型的な表現に限った意味用法上の研究が多い(ひけ1986・1987、蓮沼1991、有賀1993、塩澤1997、張2003、山本2004、劉2004・2005・2006、小出2008、藤井2010、尾谷2015・2020、馬場2016、矢島2019など)。一方、豊富な因果表現の使用実態を網羅的に調査分析した研究は董(2020)、付(2020)以外ほとんど見当たらない。

董(2020)は、『北京日本語学習者縦断コーパス(B-JAS)』を用い、上級日本語学習者との比較を通じて、日本語母語話者の作文における因果表現の使用実態及びその特徴を文頭あるいは文中、文末といった構造上の観点から明らかにした。付(2020)は、106語の因果表現を取り上げ、「YNU書き言葉コーパス」を用いて、日本語学習者と日本語母語話者によるそれらの使用状況を母語別、タスクの難易度別、作文レベル別などの観点から考察した。また、106語のうち、使用が確認

できたのは25語であり、日本語学習者（20語）のほうが日本語母語話者（14語）より使用のバリエーションが多いことを明らかにした。さらに、日本語学習者は「だから」と「それで」を選ぶ傾向であることも指摘した。しかし、董（2020）、付（2020）はいずれも学習者と母語話者の使用実態の相違に着目しており、文体的特徴に焦点を当てていない。

次に、因果表現に関する論考ではないが、接続表現の文体的特徴を網羅的に調査・分析している点で本稿と関連する先行研究をいくつか概観する。

田中（1984）は、現代日本語における接続表現の用法の文体的、場面的特徴を「会話的」「話し言葉的」「一般」「書き言葉的」「文語的」の5つに分類している。しかし、田中（1984）は全種類の接続表現を対象としているが、具体的に示されているのは「だから・しかし・すると」などの典型的な接続表現だけである。そして、田中（1984）から40年が過ぎた現時点における接続表現の文体的特徴を改めて調査する必要があると考える。

また、接続表現の文体的特徴に関する研究は田中（1984）以降も続いているが、馬場（2005・2018a・2018b）や高野・上村（2017）などのように書き言葉を対象としている研究が多く、話し言葉を対象としている研究は少ない。そのなかで、書き言葉と話し言葉の資料をともに扱って量的調査と統計の手法を用いて分析した論文としては、中俣（2022）、付（2023・2024）が挙げられる。中俣（2022）は、国立国語研究所が開発したWebアプリケーション「中納言」に格納されている検索システム「まとめて検索KOTONOHA」を用いて、並列を表す接続表現の出現状況及びその文体的特徴を計量的に分析している。付（2023）は、中俣（2022）の研究手法に倣い、逆接を表す接続表現の文体的特徴を分析している。また、付（2024）は、中俣（2022）と付（2023）の研究方法を援用し、日本語母語話者による仮定表現の使用実態及びそれらの文体的特徴を明らかにした。

以上の先行研究の成果を踏まえ、本稿では特に付（2024）での研究方法を踏襲し、日本語母語話者による因果表現の使用実態及びそれらの文体的特徴を明らかにするものである。

3. 調査資料および調査方法

3.1 調査資料

調査資料は、付（2024）と同じく全て国立国語研究所の「中納言」に収録されている各種のコーパスである。書き言葉の資料は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）から韻文を除いたサブコーパス、つまり12種類のレジスター（「新聞・雑誌・出版書籍・図書館書籍・教科書・広報紙・白書・法律・ベストセラー・Yahoo! ブログ・Yahoo! 知恵袋・国会会議録」）である。話し言葉の資料は『日本語話し言葉コーパス』（以下、CSJ）、『日本語日常会話コーパス』

(以下、CEJC)、『名大会話コーパス』(以下、NUCC)、『現日研・職場談話コーパス』(以下、CWPC)とする。BCCWJにおける各種のサブコーパスは文体的に異なる特徴を持っており、本稿では書き言葉の文体上の多様性を重視するため各サブコーパスを個々の独立した調査資料として取り扱う。これは、CSJ(学会講演などフォーマルな場面での音声)とCEJC(雑談・用談・打合せ・会合・授業など日常生活での様々な場面での音声)が同じ話し言葉のコーパスであっても、文体上の特徴が異なるのと同じである。くわえて、言語量の面からも、BCCWJのサブコーパスは他の話し言葉コーパスのデータサイズ(言語量または分量)と比べて遜色はない。よって、本稿では16種類の諸コーパスを調査資料として取り扱うこととする。

3.2調査対象および調査方法

調査対象は、主に付(2020)での106語(石黒(2016)、沖森(2016)、山口(2019)の3著書によるものである)に、田中(1984)と日本語記述文法研究会編(2009)で原因・理由として挙げられている表現のうち、上記の付(2020)に含まれていない「ついては／ひいては／そいで」の3語を加えたものとする。また、付(2020)では「このため」「このために」を「このため(に)」、「そのため」「そのために」を「そのため(に)」、「そのゆえ」「そのゆえに」を「そのゆえ(に)」、「それゆえ」「それゆえに」を「それゆえ(に)」と「～に」が付く形式と付かない形式を一語にまとめているが、本稿ではそれぞれを独立した形式として考える。よって、本稿での調査対象は最終的に113語となり、詳細は次頁の表1のとおりである。

また、本稿での原因・理由とは、主に日本語記述文法研究会編(2009)においての確定条件を表わす接続表現を指す⁽⁴⁾。具体的には、前件の出来事を原因・理由として、後件の出来事のような当然の結果・帰結が引き起こした場合(例3)、あるいは前件の出来事を根拠として、後件のような判断・推測を下す場合(例4)を典型例とする。

例3 必死で勉強した。それで、進級試験に合格した。(日本語記述文法研究会編2009：p.61)

例4 テラスまで濡れている。だから、きっと昨夜の雨は激しかったにちがいない。(日本語記述文法研究会編2009：p.62)

用例を収集する際の検索方法に関しては、中俣(2021)を参照する。個々の表現によって検索条件は異なるが、基本として検索する前に、最初に各々の因果表現を文字列検索によってその形態素を確認する。そのうえで、語彙素や書字形出現形、品詞など追加条件を設定して検索する。加えて、キーを「文頭から・節単位頭から・発話単位頭から」に、各形式の後ろに補助記号の読点がつく形式に設定して実行する⁽⁵⁾。例えば、「～。だから、～。」のような形式のものである。た

表1 調査対象 (113語 五十音順)

No.	因果表現	No.	因果表現	No.	因果表現	No.	因果表現
1	以上から	31	されば	61	そのゆえに	91	だからというわけで
2	以上からすると	32	さればこそ	62	そのようにすることで	92	ために
3	以上からすれば	33	しかれば	63	その意味で	93	だもんだから
4	以上からわかるように	34	したがいまして	64	その意味では	94	だもんで
5	以上から見ると	35	したがって	65	その意味でも	95	だもんでございますから
6	以上から見れば	36	上記のとおり	66	その結果	96	だもんですから
7	以上により	37	そいで	67	その結果として	97	ついては
8	以上によりまして	38	そういうことで	68	その点で	98	で
9	以上のことから	39	そういうところから	69	その点では	99	でありますから
10	以上のとおり	40	そういうわけだから	70	その点でも	100	であるから
11	以上の条件から	41	そういうわけで	71	それがために	101	であるからして
12	以上の点から	42	そういうわけですから	72	それだから	102	であればこそ
13	以上の理由から	43	そうすることで	73	それだけあって	103	でございますから
14	以上より	44	そうすることによって	74	それだけに	104	ですから
15	おかげさまで	45	そうであるからには	75	それで	105	ですので
16	おかげで	46	そうであるばかりに	76	それでございますから	106	でもって
17	結果	47	そうですので	77	それですから	107	ということから
18	結果として	48	そうなのだから	78	それでもって	108	いうことで
19	結果的に	49	そうなので	79	それによって	109	というわけで
20	結局	50	そうなんで	80	それにより	110	なので
21	結局のところ	51	そこで	81	それゆえ	111	ひいては
22	このことから	52	そのおかげで	82	それゆえに	112	ゆえに
23	このため	53	そのことから	83	それゆえにこそ	113	よって
24	このために	54	そのせいか	84	そんでもって		
25	この結果	55	そのせいで	85	そんなわけだから		
26	この結果として	56	そのせいでか	86	そんなわけで		
27	これだから	57	そのため	87	そんなわけですから		
28	これで	58	そのためか	88	だから		
29	これらのことから	59	そのために	89	だからこそ		
30	さすれば	60	そのゆえ	90	だからというので		

だし、CSJとCEJCでは句読点が使われておらず、「#」を用いて文を区切っているため形式の後に読点を付けずに検索を行う。つまり、両コーパスに関しては「～. だから～。」というような形式となる。

上記の検索方法に基づいて収集した用例のうち、「このために・これで・さすれば・されば・さればこそ・そいで・そこで・そのために・それで・それでもって・そんでもって・だから・で・でもって」の14語は、原因・理由以外の意味用法（例えば、目的や話題の転換、指示詞、単純接続、フィラー化⁽⁶⁾など）を持つため、これら14語については個々の用例を精査する。用例を精査する際、資料別に粗頻度（用例数）を300例未満のものに関しては、全用例を精査する。それに対して、粗頻度が300例を超える表現に関しては、ExcelのRAND関数を用いてラ

ンダムに300例のサンプルを抽出して精査することにする。そして、その300例における因果表現の割合から当該資料全体における因果表現の使用頻度の割合を算出する⁽⁷⁾。

上述した研究手法に基づいて得られた粗頻度をPMW値(100万語当たりの出現頻度)に換算し、その結果を早狩進氏が開発した統計ソフトウェア(多変量解析システム Seagull-Stat⁽⁸⁾)を用いて、コレスポンデンス分析と主成分分析(以下、PCA)、クラスター分析を行う。コレスポンデンス分析は、本稿で取り扱う調査対象全113語の因果表現と、16種類の資料がどのような分布をしているのか、その全体像を俯瞰するためである。PCAは、調査資料と調査対象の関係性を概観するために行う。クラスター分析は、16種類の調査資料をグルーピングするために行う。そして、PCAの結果を踏まえ、クラスター分析によってグルーピングされる資料グループの文体的特徴から調査対象の高頻度語の文体的特徴を分析する。なお、各種多変量解析の詳細に関しては石川他(2010)を参照されたい。

4. 調査結果

4.1 調査資料と調査対象の分布

上記3.1で述べた16種類の調査資料を3.2の調査方法に基づいて調査した結果、BCCWJにおける「法律」では、113語の因果表現の使用例が皆無であった。そこで、「法律」を除いた15種類の調査資料から得られた113語の使用頻度をPMW値に換算し、コレスポンデンス分析を行った。その結果、次の表2のとおり第1次元の寄与率が36.26%で、第2次元の寄与率が21.44%であった。第2次元までの累積寄与率が57.70%となっているので、第2次元までで全体の大半(57.70%)が説明できることを意味している。

表2 コレスポンデンス分析の結果

	次元1	次元2	次元3	次元4	次元5	次元6	…	次元13	次元14
固有値	0.62	0.37	0.23	0.18	0.08	0.08	…	0.00	0.00
寄与率(%)	36.26	21.44	13.18	10.45	4.82	4.38	…	0.25	0.17
累積寄与率(%)	36.26	57.70	70.88	81.33	86.16	90.54	…	99.83	100.00

石川他(2010)によると、「大まかな目安として第2次元までで80%程度の値が出ていればおおむね分析はうまくいっていると推定されるが、カテゴリの数を増やすと、各次元の寄与率が相対的に小さくなる(p.254)」という。表2では、第4次元までで81.33%であるが、本稿のカテゴリ数(15種類の調査資料と113語の因果表現)が非常に多いことを考慮すると、第2次元までである程度適切に分析が

できていると言えよう。次に、コレスポネンス分析を行った結果、15種類の調査資料と113語の因果表現別に作成した散布図をそれぞれ次頁の図1、2のように示す。

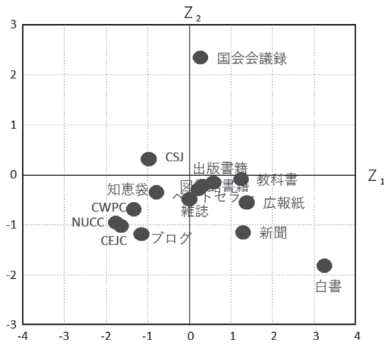


図1 コレスポンドンス分析による15資料の分布図

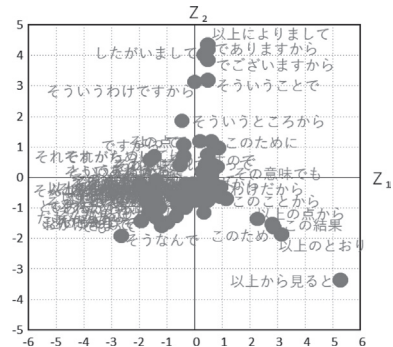


図2 コレスポネンス分析による113語の分布図

図1を見てみると、Z1軸においては「白書・広報誌・新聞・教科書・出版書籍・図書館書籍・国会会議録・ベストセラー・雑誌」が正の方向に位置しており、NUCC・CEJC・CWPC・「ブログ」・CSJ・「知恵袋」が負の方向に位置していることがわかる。つまり、正の方向に位置している「国会会議録」と負の方向に位置している「ブログ・知恵袋」の3種類の資料を除けば、他の12種類の調査資料は、Z1軸によって話し言葉と書き言葉とに区分されていると解釈できる。Z2軸においては「国会会議録」・CSJとそれ以外に区分されていることがわかる。つまり、特徴を捉えにくい書き言葉の部分を除いて話し言葉に関しては、Z2軸によって、フォーマルな場面での話し言葉と、日常会話的な場面での話し言葉とに区分されていると解釈できる。

図2を見てみると、多くの因果表現が中央のところに布置していることがわかる。付(2024)と同じくカテゴリ数が多すぎるため、原点の周辺に重なっている表現が多く、分布図から113語の分布を正確に読み取ることは難しい。また、原点の部分にはあまり特徴的ではないため説明を割愛する。ここでは、原点に離れて特徴的なものを得点表(紙幅の都合上により示すのを省く)と照らし合わせて見ることにする。Z1軸においては、正の方向に「以上から見ると・以上のとおり・この結果・このため・以上の点から・このことから」等と、負の方向に「そうなので・だもんですから・これだから・そいで・だもんで・そうなので・以上により・なので・で・それでもって・そうですので・そんでもって」等が分布してい

ることがわかる。また、Z2軸においては、正の方向に「以上によりまして・でありますから・したがいまして・でございますから・そういうわけですから・そういうことで・そういうところから・よって・その点で・ですから」等と、負の方向に「以上から見ると・そうなので・以上のとおり・この結果・でもって・このため・おかげさまで・というわけで・だもんで・これだから・以上の点から・だもんだから・そんなわけで・そんでもって・なので」等が分布していることがわかる。

4.2調査資料と高頻度語の関係

調査対象113語の「法律」での出現は皆無であった。そのため、「法律」を除いた15種類の調査資料における113語の粗頻度をPMWに換算する。次に、PMWの合計数値が10以上である因果表現を表3のように示す。

表3 PMW数値合計が10以上である因果表現(37語、括弧内はPMW数値)

だから (1763.97) で (808.53) したがって (612.75) ですから (611.13) そこで (575.53) それで (442.80) このため (312.34) 結局 (287.17) そのため (261.52) したがいまして (231.66) その結果 (205.34) なので (162.02) よって (119.14) この結果 (77.57) というこで (75.68) そいで (63.65) だからこそ (46.88) このことから (45.27) そういうこで (38.45) ですので (36.85) というわけで (33.43) それゆえ (31.53) それだけに (30.95) これで (26.97) そのために (26.05) 結果 (25.00) その意味で (22.44) ゆえに (21.33) そんなわけで (19.92) それだから (17.00) それによって (16.73) その意味では (16.18) おかげで (13.62) それゆえに (13.30) そのせいか (10.66) だもんで (10.21) これだから (10.01)
--

表3から分かるように、調査対象の113語のうちPMWの合計数値が10以上であるのは37語で、合計数値が20以上であるのは28語である。出現頻度が最も高いのは「だから」である。その次に「で」「したがって」「ですから」「そこで」「それで」「このため」「結局」「そのため」「したがいまして」と出現頻度の高い順に上位10位までを占めている。上位10位の中に典型的な因果表現とは言い難い「結局」が混入しているのは興味深い。

「法律」を除いた15種類の調査資料と上記の表3が示している37語の関係を概観するためにPCAを行った。その結果、表4が示しているように、5つの主成分が抽出された。固有値が1.0以上を満たしているのはPC3までである。そして、PC3までの累積寄与率は79.20%である。石川他 (2010) によると、累積寄与率が60～80%以上となる主成分までを分析するのが一般であるという。よって、以下、PC3までを分析する。

表4 主成分分析の結果

成分	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5
固有値	7.08	3.14	1.66	0.95	0.82
寄与率(%)	47.20	20.93	11.06	6.35	5.48
累積寄与率(%)	47.20	68.14	79.20	85.55	91.04

次に、PCAによるPC1からPC3までの負荷量散布図を次の図3～5のとおりに示す。

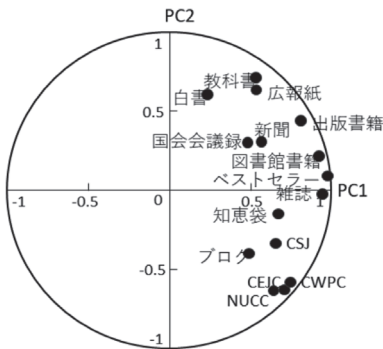


図3 PC1とPC2の負荷量散布図

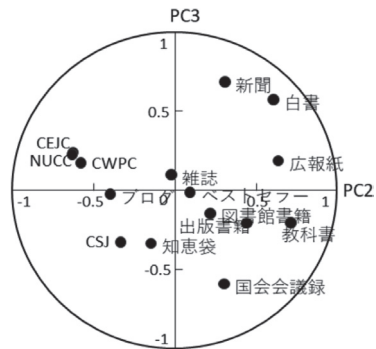


図4 PC2とPC3の負荷量散布図

図3を見てみると、PC1軸においては全ての調査資料が正の方向に位置していることがわかる。PC2軸においては「教科書・広報誌・白書・出版書籍・新聞・国会会議録・図書館書籍・ベストセラー」が正の方向に、NUCC・CEJC・CWPC・CSJと「ブログ・知恵袋・雑誌」が負の方向に位置している。つまり、PC1軸はあまり参考にならないが、PC2軸によって15種類の調査資料はおおむね話し言葉と書き言葉に区分されていると解釈できる。

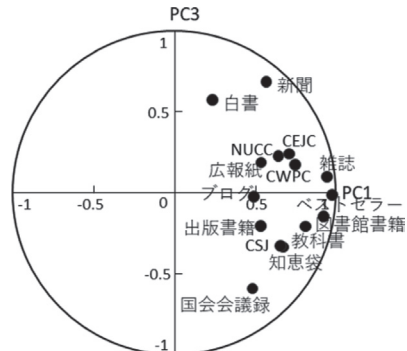


図5 PC1とPC3の負荷量散布図

図4を見てみると、PC2軸においては図3におけるPC2軸とほぼ同じ分布をしていることがわかる。PC3軸においては「新聞・白書・広報紙・雑誌」・CEJC・NUCC・CWPCが正の方向に、「国会会議録・知恵袋・出版書籍・教科書・図書

その結果・この結果・よって・したがいまして」が正の方向に、「だから・で・なので・それで・ですから」等が負の方向に位置していることがわかる。PC3軸において「このため・だから・その結果・この結果・で・そのため」等が正の方向に、「ですから・したがって・したがいまして・そこで・なので・それで・よって」等が負の方向に位置している。図4と照らし合わせてみると、「したがって・このため・そこで・そのため・その結果」は書き言葉での出現頻度が高いのに対して、「だから・で」は日常的な話し言葉において出現頻度が高いことがわかる。また、「このため・その結果」は「新聞・白書」といったやや硬い書き言葉で、「ですから・したがって・したがいまして」は「国会会議録」といったフォーマルな場面での話し言葉で出現頻度が高いことがわかる。

図8を見てみると、PC1軸は図6におけるPC1軸と、PC3軸は図7におけるPC3軸とほぼ同様の分布をしていることがわかる。図5に照らし合わせてみると、「このため」は「新聞・白書」といった硬い書き言葉で、「ですから・したがって・したがいまして・そこで」は「国会会議録」といったフォーマルな場面での話し言葉で出現頻度が高いことが再度確認できる。

4.3 調査資料のグルーピング

ここでは、15種類の調査資料（「法律」を除く）を機械的にグルーピングするため、クラスター分析を行う。付（2024）は、中俣（2022）の手法に倣い、主成分分析負荷量を基に行っている。本稿では、PMWの合計数値が10以上である37語が15資料での出現の類縁性を注目するため、相関係数に基づく非類似度にてクラスター分析を行った。その結果、図9に示しているように4つのクラスターが融合された。

まず、最初の段階で「雑誌」と「ベストセラー」が、「出版書籍」と「図書館書籍」が、「国会会議録」とCSJが、「新聞」と「白書」が、「ブログ」と「知恵袋」が、CEJCとCWPCが融合されている。続いて、「雑誌・ベストセラー」が「広報誌」と、「出版書籍・図書館書籍」が「教科書」と、「CEJC・CWPC」がNUCCと融合される。そして、「雑誌・ベストセラー・広報誌」が「出版書籍・図書館書籍・教科書」と、「ブログ・知恵袋」が「CEJC・CWPC・NUCC」と、さらに融合される。その結果、最終的に4つのクラスターに融合されている。つまり、「雑誌・

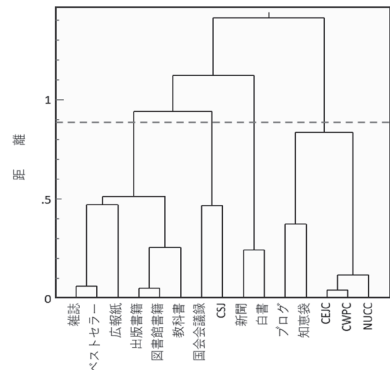


図9 15資料によるクラスター分析の結果

ベストセラー・広報誌・出版書籍・図書館書籍・教科書」と、「国会会議録・CSJ」と、「新聞・白書」と、「ブログ・知恵袋・CEJC・NUCC・CWPC」といった4つのクラスターである。

5. 考察

5.1 各グループの因果表現の文体的特徴

前述したように、本稿では113語の因果表現を対象に、16種類の調査資料を用いて日本語母語話者における使用実態を調査した。その結果、全体的に高頻度語をPMWの合計数値が10以上のものとする場合は37語で、PMWの合計数値が20以上のものとする場合は28語であることがわかった。16種類の調査資料のうち、「法律」における因果表現の使用例が皆無であった。そのため、「法律」を除いた15種類の調査資料における113語の因果表現の全体像を概観するためコレスポネンデンス分析を行った。しかし、コレスポネンデンス分析の結果はカテゴリ数が多すぎるため、分析にあまり参考にならなかった。また、113語のうち、PMWの合計数値が10以上の因果表現37語と15種類の資料の関係を概観するためにPCAを行い、そして15種類の資料をグルーピングするためにクラスター分析を行った。以下、付(2024)を做い、クラスター分析によって得られた4つのクラスターをそれぞれ一つのグループと見なし、各クラスターを次のように呼ぶ。

- ・グループⅠ（雑誌・ベストセラー・広報誌・出版書籍・図書館書籍・教科書）
- ・グループⅡ（「新聞・白書」）
- ・グループⅢ（CSJ・「国会会議録」）
- ・グループⅣ（「ブログ・知恵袋」・CEJC・NUCC・CWPC）

次に、4.2でのPCAの結果を踏まえ、各グループを代表する調査資料が持つ特徴からそのグループでよく用いられている因果表現の文体的特徴を検討する。

グループⅠでは、「雑誌・ベストセラー・広報誌・出版書籍・図書館書籍・教科書」の6種類の調査資料がグルーピングされている。これら6資料はいずれも一般的な書き言葉の資料であるため、そこに使われる言葉は極めて一般的な書き言葉であると位置づけられるであろう。また、クラスター間の平均値（紙幅の都合上により示すのを割愛する）を確認してみると、グループⅠでは「したがって・そこで・そのため・それゆえ・だからこそ」の5語が、このグループを強く特徴づけていることがわかる。加えて、4.2で「その結果・だから」の2語も一般的な書き言葉の資料において出現頻度が高いと確認できている。よって、合わせてこの7語は一般的な書き言葉として用いられやすいと言えよう。

グループⅡでは、「新聞」と「白書」がグルーピングされている。「新聞」「白書」はグループⅠの各資料と同じく書き言葉であり、いずれもグループⅠにグルーピングされている「ベストセラー・出版書籍・図書館書籍」といった小説などが多

く記載されている一般書籍や、教科書あるいは娯楽雑誌などと同じくパブリックな側面を持つ。しかしながら、「新聞」は政治や経済、社会などに関する出来事を迅速に報道する定期刊行物であり、「白書」は政府が政治や経済、外交などに関する実情あるいは施策を国民に知らせるために公表する報告書である。それゆえに、「新聞」と「白書」はグループⅠにグルーピングされている諸資料に比べて、オフィシャルな特徴を持つと言えよう。よって、両資料に用いられる言葉は比較的、客観的でやや硬い書き言葉的であると位置づけられるであろう。クラスター間の平均値を確認してみると、グループⅡでは「この結果・このことから・このため・その意味で・その意味では・その結果・そのために・それによって・ゆえに」の9語が、このグループを強く特徴づけていることがわかる。加えて、「このため・その結果」の2語は4.2でも硬い書き言葉の資料において出現頻度が高いと確認できている。よって、この9語は硬い書き言葉として用いられやすいと言えよう。

グループⅢでは、CSJと「国会会議録」がグルーピングされており、付(2024)と同じ結果となっている。付(2024)では、このグループに用いられる言葉はフォーマルな場面での話し言葉的な特徴を持つと位置づけており、本稿もそれに従う。クラスター間の平均値を確認してみると、グループⅢでは、「ですから・したがいまして・それで・よって・そういうことで」の5語が、このグループを強く特徴づけていることがわかる。加えて、4.2で「したがって・そこで」の2語が「国会会議録」において出現頻度が高いと確認できている。よって、合わせて、この7語はフォーマルな場面での話し言葉として用いられやすいと言えよう。

グループⅣでは、「ブログ・知恵袋」とCEJC・NUCC・CWPCがグルーピングされている。CEJC・NUCC・CWPCの3資料について、付(2023)はいずれも日常生活における様々な場面での自然な会話が集約されていると述べている。「ブログ・知恵袋」の2資料に関して、付(2023)ではCSJと同じグループに、付(2024)では「ベストセラー・図書館書籍・雑誌」と同じグループにグルーピングされている。そして、本稿ではCEJC・NUCC・CWPCといった日常的な話し言葉のグループにグルーピングされている。これは、付(2023、2024)でも指摘があったように、両資料はどちらもネット掲示板であるため、そこに用いられている文章は書き言葉か話し言葉か、硬いか柔らかいか、あるいは改まっているかどうかといった類型論的な観点から、ほぼ全ての文体的特徴を帯びており、どちらかに偏らず、どちらの特徴も持ち合わせていると考えられる。そのため、どの文体的特徴を持つ資料とも成り得る。それゆえに、因果表現においては書き言葉より日常の話し言葉の方が強く特徴づけられていると推測される。よって、このグループⅣに用いられる因果表現は日常的な話し言葉である特徴を持つと位置づけられるであろう。クラスター間の平均値を確認してみると、グループⅢでは、「だから・で・なので・結局・ということで・というわけで・ですので・そんなわけで・結

果・これで・そのせいか・おかげで・だもんで・それだから・これだから」の15語が、このグループを強く特徴づけていることがわかる。加えて、「だから・で」の2語は4.2でも日常的な話し言葉において出現頻度が高いと確認できている。よって、この15語は日常的な話し言葉であると言える。

5.2本稿における高頻度語の文体的特徴の整理

ここでは、PMW合計数値が10以上の表現を高頻度語(37語)と見なし、主要な因果表現として考える。これらの因果表現の文体的な特徴は上記4.2と5.1での結果を鑑み、おおむね次の表5のように整理することができる。なお、「それで」「それだけに」「それゆえに」の3語に関しては上記の分析であまり触れていなかったが、グループ別のPMW合計数値にて別途検討したうえで判定した。

表5 本稿における主要な因果表現の文体的特徴

グループ	資料	因果表現			文体的特徴
グループⅠ	雑誌 ベストセラー 出版書籍 図書館書籍 広報誌 教科書	<u>したがって</u> <u>そこで</u> <u>その結果</u> <u>そのため</u> それだけに	それゆえ それゆえに だから だからこそ		一般的な書き言葉の資料で用いられやすい
グループⅡ	新聞 白書	このことから このため この結果 そのために	その意味で その意味では その結果 それによって	ゆえに	硬い書き言葉の資料で用いられやすい
グループⅢ	CSJ 国会会議録	したがって したがって そういうことで そこで	それで だから ですから よって		フォーマルな場面の話し言葉の資料で用いられやすい
グループⅣ	ブログ 知恵袋 CEJC NUCC CWPC	おかげで これだから これで そいで そのせいか それだから	それで そんなわけで だから だもんで で ですので	ということで というわけで なので 結果 結局	日常会話的な話し言葉の資料で用いられやすい

*下線を付した表現は複数のグループに用いられやすいことを意味する。
「結果」は主に「ブログ」において出現頻度が高い。

表5を見てみると、全体的に諸先行研究で述べられている文体とほぼ変わらない結果となっていることがわかる。「だから」は因果表現として汎用的で、「したがって」と「そこで」は一般的な書き言葉に用いられやすいがフォーマルな話し言葉でも多用される傾向にある。「結果」が日常会話的な話し言葉において出現

頻度が高いのは「ブログ」での出現頻度が際立つためであると推測される。北原（2021）によると、「結果」は「『結果、失敗に終わった』（p.509）」のように「その結果」「その結果として」に代わる新しい使い方であるという。上述したように「ブログ」において「結果」の出現頻度が高いのはその裏付けとなっていると見えよう。また、4.2で述べたように典型的な因果表現とは言い難い「結局」も高頻度として観察されたのは興味深い。

田中（1984）での理由を表わす接続表現8語のうち、「ついては」「ひいては」の2語は本稿における高頻度語として確認できなかった。ほかの6語のうち、「したがって・だから・だもんで・なので・ゆえに」の5語の文体的特徴はあまり変わっていないと言えよう。しかし、田中（1984）によると、「よって」は文語的であるというのに対し、本稿では主にフォーマルな話し言葉として用いられやすいことがわかった。

なお、上記の表5において複数の文体的特徴を持つ因果表現について、グループ別にそのPMWの平均値をまとめると次の表6のとおりになる。そのうち、「だから」はグループⅠの「教科書・広報誌」でのPMW数値はそれぞれ9.69、3.46とともに10以下である一方、他の4資料ではいずれも45以上となっている。グループⅠの6資料のうち4種類において出現頻度が高いことから、グループⅠにおいてもこのグループの文体的特徴を持つと考えられる。

表6 複数の文体的特徴を持つ因果表現のグループ間PMW平均

因果表現	グループⅠ	グループⅡ	グループⅢ	グループⅣ
したがって	57.39	22.19	100.92	4.44
そこで	43.78	18.79	117.38	8.10
その結果	21.65	20.11	14.47	1.26
それで	10.44	1.30	89.74	39.62
だから	36.82	8.50	82.43	272.24

*「だから」はグループⅠの「教科書・広報誌」においてのPMW値がともに10以下である反面、他の4資料ではいずれも45以上である。

6. まとめ

本稿では、113語の因果表現を対象に日本語母語話者における因果表現の使用実態および、それらの文体的特徴を明かにするため、多様な書き言葉と話し言葉を含むコーパス資料を用いて用例を収集し、多変量解析の統計手法を用いてデータを分析し、考察を行った。

その結果、現代日本語でよく用いられる因果表現はおおむね28～37語ほどであることがわかった。そして、多くの因果表現の文体的特徴は諸先行研究に散見しているのとはほぼ一致していることがわかった。そのうち、「だから」は書き言葉、

話し言葉の区別があまりなく汎用的であり、「したがって・そこで」は主に書き言葉に用いられるが、フォーマルな話し言葉でも多用される傾向にあることが明らかになった。「結果」がブログでの出現頻度が際立つのは北原 (2021) が指摘した「その結果・その結果として」に代わる新用法の裏付けとなっていると言える。

また、田中 (1984) が載せている因果表現8語のうち、「ついては・ひいては」の2語は今回の高頻度語として確認できなかった。ほかの6語のうち、「よって」以外の5語は文体上の特徴に大きな変化が見られなかった。「よって」は田中 (1984) での文語的から、本稿でのフォーマルな場面での話し言葉に変わっていることがわかった。

注

- (1) 本稿での「接続表現」とは、付 (2024) と同様に、語としての接続詞、接続詞に相当する文法的機能を備える連語と、副詞を含む用語である。付 (2022) では、それらを「接続詞」、「接続連語」、「接続詞的副詞」と呼んでいる。
- (2) 馬場 (2010) はウェブサイト上で公開されている (2024年3月15日現在が最新)。
- (3) 本稿での「因果関係を表わす接続表現」は付 (2020) と同じく、主に沖森 (2016) による因果関係の定義に従うものである。
- (4) 沖森 (2016) では、因果関係を表わす接続語と呼んでいる。
- (5) 「だから」を例にすると、次のようになる。
 キー：(語彙素="だ" AND 品詞="助動詞") ON 1 WORDS FROM 文頭
 AND 後方共起：(書字形出現形="から" AND 品詞="助詞-接続助詞") ON 1 WORDS FROM キー DISPLAY WITH KEY
 AND 後方共起：品詞="補助記号-読点" ON 2 WORDS FROM キー DISPLAY WITH KEY WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="" AND limitToSelfSentence="1" AND tglFixVariable="2" AND tglWords="300" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"
- (6) 小出 (2008) は、独話に用いられる接続詞「で」はフィラーとしての機能を持つと指摘している。
- (7) コーパス研究での多義語について、荻野 (2009) のように先行研究においてはサンプル数を100例に設定している論文もあるが、より詳細に分析するために本稿では300例に設定した。本稿では、全ての因果表現において粗頻度が5000例超えたのは、「それで」(CSJに5382例)、「だから」(CEJCに5858例)、「で」(CSJとCEJCにそれぞれ46219例、10417例)の3語のみである。他の因果表現は、粗頻度が1000例～3000例台の表現も相当数ある中、1000例以下の表現が圧倒的に多い。そのため、3000例の1割である300例のサンプルより母集団の割合を推測することには一定の意義が認められると判断した。
- (8) 石川他 (2010) に添付しているCD-ROMに収録されているSeagull-StatはExcel2007・2010対応機能限定版である。今回は多変量解析システムSeagull-Stat有償版 (Excel2013～2019) を利用した「[Excelアトイン工房]」のホームページから入手可能。ホームページのURLをここに示す。<https://www.7b.biglobe.ne.jp/~hayakari/index.html> (最終閲覧日2024年2月25日)

参考文献

- 有賀千佳子 (1993) 「対話における接続詞の機能について—『それで』の用法を手がかりに—」『日本語教育』79, pp.89-101
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 (2010) 『言語研究のための統計入門』くろしお出版
- 市川保子編 (2010) 『日本語誤用辞典外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』スリーエーネットワーク
- 石黒圭 (2016) 『書きたいことがすらすら書ける! 「接続詞」の技術』実務教育出版
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋 (2009) 「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12, pp.73-85
- 荻野綱男 (2009) 「コロケーション辞書」『国文学解釈と鑑賞特集日本語研究とコーパス』74-01, pp.70-78
- 沖森卓也 (2016) 『文章が変わる接続語の使い方』ベレ出版
- 尾谷昌則 (2015) 「接続詞『なので』の成立について」『日本語語用論フォーラム 1』pp.183-208
- 尾谷昌則 (2020) 「『なので』が接続詞化するまで」『動語用論の構築へ向けて2』pp.70-91
- 北原保雄 (2021) 『明鏡国語辞典第三版』大修館書店
- 小出慶一 (2008) 「発行行動における『で』の役割—『で』のフィラー化をめぐる—」『埼玉大学紀要教養学部』44-02, pp.27-40
- 塩澤和子 (1997) 「順接型接続詞の意味と用法 (1) —ダカラ・ソノ結果・従ッテ・スルト・ソコデ・ソレデー」『文芸言語研究言語篇』31, pp.23-55
- 高野愛子・上村圭介 (2017) 「レジスター別出現頻度に基づく順接接続詞の文体差の評価—現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) の用例分析から—」『語学教育研究論叢』34, pp.273-293
- 田中章夫 (1984) 「接続詞の諸問題—その成立と機能—」『研究資料日本文法4修飾句独立句編副詞・連体詞・接続詞・感動詞』pp.81-123
- 張 麟声 (2003) 「論説文体の日本語における因果関係を表す接続詞型表現をめぐる—『その結果』、『そのため』と『したがって』—」『日本語教育』117, pp.23-32
- 董 芸 (2020) 「日本語母語話者の作文に見られる因果関係を示す表現の特徴—上級日本語学習者で使われにくい表現を中心に—」『一橋大学国際教育交流センター紀要』2, pp.123-133
- 中俣尚己 (2021) 「『中納言』を活用したコーパス日本語研究入門」ひつじ書房
- 中俣尚己 (2022) 「並列を表す接続詞と文体—『まとめて検索 KOTONOHA』を用いて—」『計量国語学』33-7, pp.422-434
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法7』くろしお出版
- 連沼昭子 (1991) 「対話における『だから』の機能」『姫路独協大学外国語学部紀要』4, pp.137-153
- 馬場俊臣 (2005) 「逆接の接続詞・接続語句」『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究『太陽コーパス』研究論文集国立国語研究所報告122』pp.173-191
- 馬場俊臣 (2008) 「文体に関わる接続詞研究文献とその概要」『北海道教育大学語学文学会』46, pp.9-29
- 馬場俊臣 (2010) 「現代日本語接続詞研究—文献目録・概要及び研究概観—」おうふう
- 馬場俊臣 (2016) 「接続詞『だから』をめぐる—『しかしだから』『だからこそ』『だからか』『だからといって』—」『北海道教育大学紀要人文科学・社会科学編』67-01, pp.1-14
- 馬場俊臣 (2018a) 「接続詞の文体差の計量的分析の試み—『BCCWJ』図書館サブコーパスの文体情報』を用いて—」『北海道教育大学紀要人文科学・社会科学編』69-1, pp.1-14
- 馬場俊臣 (2018b) 「接続詞の文体差の探索的分析—『BCCWJ』図書館サブコーパスの文体情報』5指標を用いて—」『札幌国語研究』23, pp.1-8

- ひけひろし (1986) 「接続詞『そこで』『それで』」『教育国語』86,pp.74-88
- ひけひろし (1987) 「『それで』『だから』『したがって』」『教育国語』88,pp.46-59
- 付 英 (2020) 「日本語学習者作文における因果関係を表す接続表現に関する一考察—「YNU書き言葉コーパス」を用いて—」『台湾応用日語研究』26,pp.129-154
- 付 英 (2022) 「中国人学習者向けの日本語教科書における接続表現—その出現状況と文法項目の解説について—」『言語の研究』10,pp.37-60
- 付 英 (2023) 「逆接を表す接続表現の文体的特徴に関する一考察—『まとめて検索 KOTONOHA』を活用して—」『言語の研究』12,pp.49-62
- 付 英 (2024) 「仮定条件を表す接続表現の文体的特徴—現代日本語のコーパス資料を中心に—」『言語の研究』14,pp.61-78
- 藤井涼子 (2010) 「因果関係を示す表現『そのため』と『したがって』の用法—事態系の接続表現と判断系の接続表現—」『同志社国文学』27,pp.118-105
- 矢島正浩 (2019) 「近現代話し言葉資料における原因理由系の接続詞的用法について」『国語国文学報』77,pp.64-52
- 山口哲朗 (2019) 「文章が劇的にウマくなる「接続詞」」明日香出版
- 山本貴昭 (2004) 「談話における接続詞『で』の用法—女性話者の談話を対象として—」『国文学攷』181,pp.13-27
- 劉 怡伶 (2004) 「接続語『したがって』と『それゆえ (に)』の意味・用法」『日本語教育』120,pp.43-52
- 劉 怡伶 (2005) 「原因を表す『そのため (に)』の意味・用法」『銘傳日本語教育〔銘伝日本語教育〕』8,pp.89-105
- 劉 怡伶 (2006) 「接続後『だから』の意味・用法—前件と後件に因果関係が認められる『だから』を中心に—」『世界の日本語教育』16,pp.125-137